

## 強盗犯に愛の鞭

The Break In by Kazami13



- 1 -

暑い七月の夜のことだった。

ジェナ・ロビンソンは、地下一階のトレーニングルームでエクササイズを続けていた。

身長162センチ、鍛え上げられたみごとなボディに、男なら誰でも見つめてしまいたいほど、豊かな乳房が激しく左右に揺れる。彼女がサンドバッグにパンチをたたき込む度に、

彼女の家のすぐ外、黒ずくめの服を着た190センチ近くありそうな巨漢がうろついていた。

彼はこれまで何度も、彼女の家のそばを車で通り過ぎていた。

ジェナは、若くして急成長するベンチャー企業のCEOだ。誰しも夢見るような、プールつきの豪邸に住んでいる。

彼は、キッチンまで丸見えの窓を開け、内部に侵入した。手に大きなバッグを持ち、めばしいものはないかと探っていた。だが、残念なことに、時計や花瓶をのぞいて、金目のものは全て銀行に納められているようだった。

- 2 -

ジェナは、彼女の小さなお尻やすらりとした美脚、そして男性の性器を勃起させる乳房を協調する、身体にびったりとしたスパandexで、エクササイズをつづけていた。彼女は、自分の身体、なかならず胸がたいそう気に入っていた。それが、彼女に与えるパワーの大きさを知っていたからだ。

やがて、喉の乾きを覚えたジェナは、エクササイズを中断し、飲み物を取りに一階へとあがっていった。ある度に、110センチの（むろん、天然モノ）のバストが上下左右に激しく揺れた。

彼女が一階に顔を出したとき、きよろきよろめばしいモノを探していた巨漢と目があつた。巨漢はぎよつと棒立ちになり、ついで、彼女の胸に視線が釘付けになった。

ジェナの抜群のプロポーションが、彼の思考から冷静さを奪った。どうせ盗むに値するものが見つからないのなら、この女をいたでいていこう、と決心した。

それが彼の不幸だった。ジェナが護身術を習っていて、男性の急所について知悉し、その部分を攻撃することが好きだということを、彼は知る由もない。

ジェナは言った。

「出ていって。さもないと、あなたの金玉をミンチにしちゃうわよ、この醜男！」

巨漢は嘲笑した。

「おまえにそんなことができるわけねえだろ、ベイビー」

彼はジェナに歩み寄り、彼女の巨大な肉の丘をつかんだ。

そのとき、彼女の脳裏にアイデアが浮かんだ。巨漢が、彼女の身体に性欲をかき立てられたことは、悪いことではない。性的に興奮した男が、如何に弱みを見せるかを、彼女は熟知していた。

巨漢は、鼻息荒く、彼女の乳房を揉みしだきはじめた。彼女はそれに応じるふりをした。手を男の股間に差し入れ、性器を愛撫し始めたのだ。

巨漢はぎよつとしたが、やがて、これでレイプという犯罪を犯さずにすむと考えた。彼女も合意のサインを出しているのだから。

すでに半ば堅くなっていた巨漢のペニスには、あつという間に張り裂けそうに勃起した。

ジェナはそつと巨漢の表情を見た。半ば目を閉じ、今にも射精しそうに震えている。

これ以上のサービスは無用だ。

ジェナは彼の顔に平手打ちを食わせた。同時に、左手でぎゅつと力を込めて男の睾丸をひねりあげた。

不意をつかれた男は悲鳴をあげた。全身をばたばたさせ、なんとかジェナを突き飛ばした。

「てめえ……」

巨漢はうなつた。眼がらんと怒りに燃えている。

「許さねえ……殺してやる」

巨漢は拳を握りしめ、殴りかかってきた。ジェナは軽くパンチをさけた。巨漢の拳は彼女の背の壁に衝突し、右手を痛めただけだった。

巨漢が苦痛の悲鳴をあげると同時に、さっと腰をかがめた。巨漢の目に、スポーツブラ越しに深い胸の谷間がのぞいた。彼女は一瞬の隙をついた。見事なアッパーカットを、男の睾丸に見舞ったのだ。

巨漢は絶叫し、身体を前に折り曲げた。今度は、その鼻柱をアッパーカットが打ち抜いた。巨漢は血がしたたる鼻孔を両手で押さえた。ジェナは立ち上がり、微笑を浮かべ、それから見事な長い脚を、巨漢の股間に打ち込んだ。男のデリケートな肉玉が、一瞬ひしゃげるのが感じられた。

男はへなへなと床にくずおれ、今にも失心しそうだった。彼女は、素早く傍らの花瓶を取り上げ、相手の頭に叩きつけた。花瓶はくだけ、巨漢は仰向けに倒れた。

ジェナは、大きく脚を広げ、突き出た胸をさらに突き出し、腰に手をあてて、すでに意識をうしなつた巨漢を見おろした。

「こいつを警察に突き出すのは簡単だけど、出所したらどうせ同じ事を繰り返すだけね」

彼女は呟き、にやりと笑った。

「泥棒だけならまだしも、誰か他の女性をレイプさせるわけにはいかないわ。二度とそう出来な

いようにしておくのが正義というものね」

ジェナは男のズボンを脱がせた。ズボンの下は、びっちりした白のブリーフだった。

ジェナは男の顔にまたがり、両手で睾丸を握りしめた。力をこめるにつれ、睾丸が腫れ上がり、何倍もの大きさにふくらんだ。

男の意識が戻つたらしい。全身が激しく痙攣し、ジェナの陰部に塞がれた口のなかで、くぐもつた呻きが漏れた。ジェナは容赦なく、睾丸をひねりあげた。

ぐしゃっ!!!

肉のはじける音とともに、睾丸が見る見るボールのように膨張した。同時に、ペニスの先端から嫌な匂いのする赤黒い液体が溢れだし、白いブリーフを濡らした。

一時間後、警官隊が駆けつけ、去勢されて瀕死の巨漢を運び出した。

「やったね」

女性警官が、ジェナにそつとウィンクした。

「私たちは法律に縛られてるから、やりたくてもやれないのよ」

巨漢は強盗と強姦未遂で五年の刑に処せられた。

ジェナは、ミニスカートと胸ぐりの深いドレスを着て、裁判を傍聴した。

裁判の最中、巨漢は彼女の胸の谷間と、自分の股間をしきりに見比べ、顔を苦しげにゆがめた。ジェナはおかしくなつてひとり微笑んだ。

巨漢の性器が、かつては反応した彼女の胸の谷間を見ても、ぴくりとも動かなくなつていくことを、彼女は知っているのだから。